
国 際 健 康 開 発 *I H D*

特定非営利活動法人(NPO)会報 14号 2014年12月

2015 年を迎えて

牛島廣治

日本大学医学部病態病理学系

微生物学分野

ushijima-hiroshi@jcom.home.ne.jp

新年おめでとうございます。本年もよろしく願います。

特定非営利活動法人(NPO)国際健康開発が2007年12月に認可されてから7年経過しました。また2008年10月に第1回の会報を始めて6年(今回は14号)となりました。国際健康開発という名称は今では大学の専攻や講座名に使われるようになってきましたが、わが国では私たちが最初に使ったのではないかと考えております。この間、正会員・賛助会員の皆様には厚くお礼申し上げます。また会員ではなくても催しなど参加いただいた方々には感謝いたします。

このNPOは、病原感染源を簡易・迅速に検査し診断するためのキットを開発し、その成果物を、海外諸国の政府、団体、医師、研究者等に無償で、あるいはその国の経済水準に見合う低価格で提供し、また、必要に応じて海外諸国からの留学生や研究者の招聘、海外活動支援および海外諸国への研究者派遣を支援することによって、病原体感染に対する予防法及び治療法の開発に貢献することを目的とするとなっております。法人の活動の種類や会報については「多民

族文化社会における母子の健康」のホームページ

<http://square.umin.ac.jp/boshiken/> の中のnpoを参照ください。このホームページは、厚生労働省の研究活動のために以前に立ち上げたのですが発展的にその後の活動に利用させてもらっております。

さて2014年のことを振り返って見たいと思います。政治に関しては、東欧、中東、東・南シナ海における緊張等々、色々な国々の間でややもすれば大きな戦争になりかねない危機が見られました。また不安定な政治の中から自称イスラム国が生まれました。わが国ではアベノミクスの経済優先の政策、集団的自衛権などが進められています。温暖化の影響も加わって、多くの場所で自然災害が見られました。一方人災と言われる旅客船・旅客機の事故もありました。東日本大震災、福島での原発事故からの復旧はなかなか進みません。一方、明るいニュースとしてはテニスの錦織選手、スケートの羽生選手、相撲の白鵬などの活躍がありました。また東京での2020年オリンピック開催が2013年に決まり少しずつ機運が高まりつつあります。科学の面では、STAP細胞が期待はずれというか失望に終わりました。一方、ノーベル物理学賞が3人の日本の科学者に授与されました。エボラ出血熱が西アフリカを中心に流行しました。また、わが国でのデング熱の発症例が見られました。

これらの事は、我々に希望、教訓を与えてくれました。

NPO の目的である診断薬の開発に関しては、ノロウイルスの場合は既に幾つかの会社から市販されるようになりました。一定の成果が出、今後ロタウイルス、アデノウイルスなどと組み合わせたキットが望まれています。一方、下痢症に関わるウイルス、細菌は多種にわたるため廉価で、迅速で、低濃度の病原体を検出可能な方法が求められます。このことは呼吸器感染でも当てはまります。RSV、インフルエンザウイルス以外にメタニューモウイルス、デングウイルスの診断薬の普及と可能ならライノウイルスのイムノクロマトによる診断が望まれるところです。現在の免疫学的手法では限界があるため今後新しい手法の開発が望まれます。

目的の1つである診断薬の供給については、一部バングラデシュで使用されましたが幅広く供給するには至りませんでした。

2013年には、一緒に研究していた元留学生をベトナムや米国から招聘して第1回国際アジア小児感染症研究会を開催しました。2014年は残念ながら開催できませんでした。2015年には米国、タイから研究者を招聘して第2回国際アジア小児感染症研究会の開催を予定しています。日常的には、私たちが所属する東京大学および日本大学の研究者の支援を行っております。診断や分子疫学的内容が多いのですが、着実に研究成果が出ております。Pubmed (<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed>)で検索いただければ幸いです。



写真1 英国オックスフォード 牧場で見た羊の群れ

現在、アジアでは中国、インドネシア、ベトナム、ラオス、タイ、バングラデシュ、インド、スリランカなどと交流があります。アジア特に東南アジアを中心に活動が続けたいと思っております。皆様のご支援今後ともよろしく願います。今年は干支では羊（または未）です。羊は群れをなして行動するため、家族の安泰や平和をもたらす縁起物とされています。また羊生まれの人は穏やかで温かく、優しい。正義感が強く、真面目だといわれています。今年はそうあってほしいと思います。江下先生と私が米国留学時代の恩師が今イギリスにおり、2年前に Oxford で行われた同窓会・研究発表会（12 号参照）のおり、近くの牧場で見た羊の群れの写真を添えます(写真 1)。今年の賀状に使いました。よろしく願います。

インドネシア・マナド出張報告

高梨 さやか
東京大学大学院医学系研究科
発達医科学教室

Asian Development Bank (ADB) 奨学生として私どもの教室の修士課程に所属している Angela Kalesaram さんの研究課題として、彼女の出身大学である Sam Ratulangi 大学との共同研究を行っている。”Molecular epidemiological study of diarrheal viruses in hospitalized children in Manado, Indonesia”と題するプロジェクトはもともと、ADB 応募時から牛島先生がご指導くださってきているが、Angela さんの博士課程進学希望等も鑑み、長期的視点から深く検討していくべく、当教室から高

梨が科研費若手(B)にプロポーザルを提出したところ、大変ありがたいことに今年度より3年間、研究費をいただけることになった。責任をもってプロジェクトを遂行すべく、初年度に是非、研究実施場所を訪問したいと考え、サンプル受領のための Angela さんの帰国にタイミングを合わせて、7月30日から3泊5日の強行軍でインドネシア出張を執り行った。

マナドまでの航路はシンガポール経由のものもあるようだが、今回は、全日空でジャカルタまで、そこからマナドまでガルーダ・インドネシア航空で飛んだ。不死鳥”Galuda”をモチーフにした航空会社のロゴマークに見守られながら、無事、Manado Sam Ratulangi 空港に到着。Sam Ratulangi というのは現地の有名な王族の名前だとの Angela さんの説明を聞きつつ、彼女がお勧めしてくれた大通り沿いの Quality Hotel に到着、長旅の疲れを癒した。

翌朝は、Angela さんが授業を担当したことがあったという若いレジデントの先生の案内で、小児科病棟回診をさせていただくことから始まった。15人ほど収容可能な大部屋のベッドの柵は、一部錆びが目立つものもあったが、其々のシーツは清潔にピンと張った状態でベット上に敷かれていたのが印象的であった。軽症の胃腸炎患者などが入院するという病棟では、患者数は少なめで、一部点滴治療を受けている児もいたが、概して病棟の雰囲気は明るいもので、入院患児の兄弟と思われる幼子や、その母親が親しげに写真撮影を求めてきたりもした。約束の10時になるのを理由に、病棟を引き上げ、小児科教授の Prof. Dr. dr. Adrian Umboh, Sp. A (K) との面談に移った。

ちなみにインドネシアでは、博士号取得前の医師には” dr. ” と小文字のドクター号のみを配し、その前に” Dr. ” を配することが可能な博士号取得者と区別をしていると Angela さんが説明してくれた。今回のプロジェクトの総指揮者である Prof. Dr. dr. Sarah M. Warouw, Sp-A(K) は不在で残念ながらお会いすることがかなわなかったが、Nephrology を専門とする Prof. Umboh も非常に丁寧にもてなしてくださった。今回のプロジェクトに小児科一同大変期待しているとのコメントをいただいた後、小児科定例カンファレンスに移った。出席者は小児科の教授、講師などの数名の上級医師と 30 名前後の若いレジデントたちであった。Prof. Umboh のご丁寧な紹介の後、発達医学教室の紹介、今回のプロジェクトの概

要の紹介をさせていただく機会を得た。続いて Angela さんがインドネシア語にてプロジェクトの progress report を行った。彼女のデータ発表は何回も英語で聞いたことがあったが、見慣れた英文スライドでも音楽的なインドネシア語による発表はまた独特の趣があった。フロアとの質疑応答において、米国 CDC のサポートによる首都ジャカルタ近辺の同様の分子疫学研究は散見されるが、マナド市含む北スラウェシでは初の試みであり、A 群ロタウイルスの季節性、遺伝子型の分布の相違など非常に興味深いとのコメントがあった。胃腸炎児の臨床検体は、今回のカンファレンスに出席していた現場のスタッフの協力があるからこそ収集可能であり、彼らの努力に報いる責任があると痛感した（写真 1）。



写真 1：Sam Ratulangi 大学小児科スタッフとの集合写真

午後は、寄生虫学教室の head である Dr. dr. Josef S. B. Tuda, M. Kes, Sp. Par (K) に、プロジェクトのサンプルを-20℃フリーザーに保管させていただいているラボを案内していただいた。Dr. dr. Tuda は、大分大学の江下優樹先生の長年のご友人であるということで、Angela さんが日本に留学するきっかけ、コンタクトを作ってくださった方であった。東大を始め、日本の複数の研究施設で研修を受けられたこともありということで、目をくるくると回転させながら、懸命に日本語で御挨拶してくださろうとする様子に Dr. dr. Tuda の誠実なお人柄を感じた。ラボには、JICA から供与されたという立派なリアルタイム PCR や、CO₂ インキュベータなどが取り揃えられて

いた。後者は、CO₂ ボンベの確保が難しく、現在は使用できていないとのことであった。こうした厳しい環境の中でも、複数の海外共同研究を実践して研究会を開催したポスターを見せてくださったり、日本の手回しかき氷製造機を持ち込んで、試薬一時保管用の crush ice を作成する様子をみせてくださったり、創意工夫を発揮して精力的に研究教育活動を行っている様子に感銘を受けた（写真 2）。

翌日は、来年度以降、ADB もしくは製薬企業の奨学金を用いて日本に留学したいという複数の若者と個別に話し合う時間を持った。具体的な carrier plan として青写真が描き切れていない部分も若干見受けられたが、日本に抱く夢、期待感を強く感じた。



写真 2 Sam Ratulangi 大学寄生虫学教室スタッフとの集合写真

これらの全てがかなうわけではないが、その幾つかでも実現し、長期的にアジアの若者の研究・教育に資することができれば素晴らしいと考えた。

自分自身は初めてのインドネシア渡航であったが、Angela さんが食事、タイムスケジュールを配慮してくれたこともあり、とてもスムーズな計画で充実した時間を過ごすことができた。タイの”トムヤンクン”よりは辛くない酸っぱいシーフードスープ(”ソトサピー”というらしい)が、私の口にとっても合い、ホテルのルームサービスでも頼んでしまったほどだった。マナドは、古くから交易の盛んな港町として知られ、香辛料貿易の拠点としてオランダの植民地にもなったという歴史がある。キリスト教徒が半数以上を占めるとのことであるが、少し車を走らせてもらうだけで、教会、中国式寺院、モスクなど各宗教の施設が混在する様子が理解できた。中国式寺院の敷地内で、”オランダ東インド会社“による設営という大砲を案内してもらい、歴史と宗教の巡りあわせに思いを馳せた。セレベス海の青さが目に痛いほどであったが、穏やかな海風が、今回のプロジェクトに対してのやりがいと共にある肩の荷の重さを和らげてくれるものとして受け止め、帰国の途に就いた。

モンテリオールと長春

沖津 祥子
日本大学医学部病態病理学系
微生物学分野

2014 年夏、初めてこんなに短い期間に 2

回の海外出張を行ったので、その報告をしたい。最初はカナダ・モンテリオールでの IUMS2014 への出席で、7 月の終わりであった。この学術集会は国際微生物学連合 2014 会議という日本名になるのだが、Bacteriology & Applied Microbiology Division (BAM)、Mycology and Eukaryotic Microbiology Division、Virology Division という 3 つの分野の学会が joint で開催している学術集会であり、今まででも何回か出席したことがあった。前回は 2011 年に札幌で開催された。この時の会長はインフルエンザウイルスで名高い東京大学医科学研究所の河岡義博先生だったが、東日本大震災の年だったのでその開催に苦勞されていたという印象がある。学会のサイトには札幌が震災とくに福島とは離れていることを強調した文章が掲載されていた。河岡先生の努力の結果としてまずまずの人が集まったのではなかっただろうか。今回は前回よりも出席者が少ないという印象であった。もしかしたらこのような広い分野の学術集会は曲がり角に来ているのかもしれない。それよりもテーマを絞って、たとえば私たちの分野であったなら、calicivirus や dsRNA virus の学会の方が多くの人が集まって熱い議論が交わせるのかもしれない。以前のこと多くの研究者がこの IUMS に集まったときには、3 つの学会は時期をずらして開催されていたように思う、たぶんそうしなければ場所が確保できないとか、人の流れをコントロールできなかったのではないだろうか。しかし、今回は全く同時期の開催であった。このモンテリオールの学会会場というのは、かなり広くてそれぞれの分野のいくつもの workshop を同時に開催する

ことができるということもあるのだが、やはり参加者数が結果として少なかったのではないかと思う。そして、実際に発表されたポスターの掲載数は少なかった。企業展示を挟んで向かい側に細菌学、こちら側にウイルス学と真菌学のスペース、そして所々に当日キャンセルの白いスペースがめだった。この当日キャンセルに関しては国際学会では割合とよく見られる風景なので

はあるが（写真1）。

モントリオールはケベック州の最大の都市で、カナダ全体で見ればトロントに次ぐ大都市だが、人がたくさんいる様に見えて、実は閑散としている印象があった。観光客が多く歩いている繁華街を一步入るとそこは人があまり歩いていない。私はとくに郊外に行ったわけでもなく、人がたくさんいる中心部にいたはずなのであるけれ



写真1 IUMS2014 が開催された Palais des congress de Montréal
(Montreal Convention Centre)

どこの人口密度の少なさを強く感じた。この都市のカナダの中の位置づけとしては東に近く、そしてカナダの最もアメリカに近いところに存在する。セントローレンス川という大西洋と五大湖をつなぐ川のほとりにある。ケベック州というのはフランス語圏にあるということを聞いていたが、確かにここではフランス語が強く、バイリンガルの人が多いという。店で何か購入すると相手は” merci, thank you ” という。ここで merci が先であることに注意。通りの名前や地下鉄の駅名はほとんどフランス語である。IUMS の発表は英語で行われたが、プ

ログラム集の冒頭には見開きで英語とフランス語が併記してあった。

会期終了後、カナダで最も歴史のある大学というマギル大学にいった。といってもほんのその一部分の外観をみただけなののだが、石造りの重厚な建物に緑が多く、その庭ではリスが遊んでいた。近くのマッコード博物館は小さい博物館だが、モントリオールの歴史をみることができた。モントリオールはジャック・カルティエ(その名前をつけた広場があり、そこは周りにはレストランが多く並び、観光客でにぎわっているところである) というフランス人



写真2 昔ながらの建物と現代風の建物が共存するモントリオールの街並み



写真3 日中ウイルス学会会場（長春、新民賓館）

が初めてこの地にやってきて、原住民から見れば侵略、彼らから見れば植民・探検が始まったことがその歴史の端緒となる。しかし、これが1535年のことであり、実際に入植が始まったのはそのおよそ100年後であることから、カナダは実に新しい国なのだ。町には石造りの重厚な歴史的建物がある一方で、新しい現代的なビルと一緒に並んでいる（写真2）。たとえばモントリオール美術館も現代アートの美術館でもある。また、モントリオールはジャズ・フェスティバルが名高いところであり、この学術集前回の中国開催（第8回）はハルビン（哈爾濱）での開催であったが、長春はハルビンから近く、今回の学会の運営には哈爾濱医科大学の教授たちが大きく関わっていた。

会開催のすぐあとでは映画祭も開かれていて、日本の出品作が受賞して話題になったが、新しい文化の発信地でもあるのだ。

約1ヵ月後、第10回日中ウイルス学会に参加するため、中国の東北地方の長春にいった。前回の第9回学会は札幌の北海道大学で開催され、中国と日本で交互に開催される semi-closed の学会である。第7回学会は牛島教授の主催によって東京大学で開催されており、私はその前の第6回学会が上海で開催されたときから、出席させていただいている。

長春の北緯は日本の旭川とほぼ同じで、暑い夏はすぐ終わって非常に寒い冬が長いという。今回の訪問時は蒸し暑い日本に比べて涼しい気候で空は青くきれいだった。ハ

ルビンとは 200km くらいの距離だが、そこは黒竜江省で、長春は吉林省とのことだった。また、吉林省は北朝鮮と接しており、実際に行くにはかなり遠いため今回は行かなかったのだが、長春からエクスカージョンとしてお山に行きましょうというところは北朝鮮との国境にある長白山（北朝鮮では白頭山）のことという。そのような地理的環境にある。学会では双方から 43 題の発表があった（写真 3：会場の写真）。学会はウイルス学におけるあらゆる分野を対象と

している。中日双方から座長が出て進行役となる。日本側からは 15 名が参加した。かつては主として日本国内の会場で開催したこともあったが、現在は日本と中国との持ち回り開催となっている。現在の中国科学界の躍進によってこの学会の役割も終わったのではないかと考える向きもあったが、次回は香川県の観音寺市で 2 年後に開催されることが決まった。

学術集会終了後、吉林大学病院を見学させていただいた。大きな病院で非常にたく



写真 4 吉林大学医学部と白求恩の銅像

さんの患者さんが訪れていた。もともと白求恩（ベチューン）医科大学（カナダからやってきたノーマン・ベチューンを記念して作った大学だそう）という名前だったが、その後吉林大学と統合されたという。しかし今でもこの白求恩は医学部の名前に冠として残っており、町で見かけた医学部の建物にも掲げられていた。そしてさらにこの大学の建物自体がかつての日本の軍部の建てたものすごい大きな建物が残っていてそれを現在でも使用しているのだ（写真4）。このようにかつての日本の支配のあとが未だ色濃く残っていた。実は長春はもともと日本・関東軍による戦時中の傀儡政権である満州国の首都（新京）で、満州国皇帝である愛新覚羅溥儀の皇宮が博物館「偽満皇宮博物院」として公開されていた。私は満州も愛新覚羅溥儀も知ってはいたが、ここがその首都とは全く知らなかった。そんな土地柄なのであるが、中国側の研究者たちは非常に歓待してくださった。中国側の実質上の主催者である哈爾濱医科大学の教授は日本にかつて留学していたことがあり、今でも日本語を話される。飛行場まで送迎してくださった吉林大学の学生さんたち、参加者だったのにもかかわらず通訳をしてくださった北京大学の段さん、感謝したい。私も微力ながら日本と中国との友好に協力したいと思う。

チュラロンコン大学での2週間

井上 茉南

東京大学大学院 医学系研究科 修士課程
国際保健学専攻 発達医科学教室

8月10日から23日にかけて、UEHAS (Urban Environment and Health in Asia) プログラムの一環としてタイ・バンコクのチュラロンコン大学へ2週間短期留学に行っていました。UEHASでは、東京大学工学系研究科都市工学専攻と医学系研究科国際保健学専攻が協力し、工学と医学が連携した教育プログラムを提供しています。また、タイ・インドネシアの6つの大学と互いに学生を派遣し国際交流を推進しています。

チュラロンコン大学では、公衆衛生を専攻する大学院生と一緒に講義や学校行事に参加したり、調査に出かけたりしていました。短い期間ではありましたが、初めての留学、そして初めての東南アジアであったため見るもの聞くもの全てが新鮮でした。その中でも”Wai-kru ceremony”と、週末に海辺のChonburi地方まで泊りがけで出かけ、参加したタイ国民健康調査のお手伝いが特に印象に残っています（写真1）。

“Wai-kru ceremony”とは、日頃学生を教導いてくださる先生方に感謝の意を表す式典で、小学校から大学までで行われている伝統的な行事だそうです。式典では衣装に身を包んだ先生方へ花束を渡し、詩の朗読、公衆衛生学専攻の歌の合唱もありました。式典の後にはタイの伝統的な菓子も振る舞われ、貴重な体験をすることができました。

タイの国民健康調査は、調査対象地域の人々が集まりやすい場所を会場とし、期間中は調査チームが毎週末現地に出向き、住民の健康診断を行っています（写真2）。私が出向いた時は広場と消防署の駐車スペース（万が一出動しなくてはならない場合は



写真1 Wai-kru ceremony 後の記念撮影

どうするのだろう、と疑問に思いました)を会場としていました。調査は幼児から高齢者までを対象としており、身体測定や血液検査、問診などに加え、幼児では知能テスト、高齢者では歩行テストなど年齢に応じた検査も行われていました。検診というどうしても敬遠されがちな印象を持っていましたが、検査終了後にはお菓子や温かいスープが振る舞われたり、ちょっとしたグッズのようなものが配布されたりとどこかお祭りのような雰囲気があり、住民が参加しやすい工夫がされているのだと思いました。

Chonburi から戻った後はチュラロンコン大学の先生方と、一緒にプログラムに参加した学生の前で今回学んだことについて発表する機会がありました。発表にあたり

タイと日本の健康問題と対策について調べましたが、タイにおいても食生活の洋風化などの要因によりメタボリックシンドロームが問題になっていることがわかりました。また、日本における対策として特定健康診断などの取り組みについても調べたため、タイのことを知るだけでなく日本について考える良い機会になったと思います。普段はロタウイルスワクチンについて研究しているため、違う領域に関わることで視野も広がったように思います。

貴重な経験をさせてくださった東京大学、チュラロンコン大学の先生方、タイで出会った方々に感謝申し上げます。



写真 2 タイ国民健康調査の看板とテント

多文化共生社会にむけた持続可能な開発の
ための教育（ESD: Education for
Sustainable Development）の重要性

堀田 正央

埼玉学園大学 子ども発達学科

私の研究テーマである「多文化共生社会における互恵的な保育・教育」すなわち、色々な文化を持つ人々からなる社会での相互に便益な保育と教育、の出発点は平成 13 年度から 3 年間、牛島先生を主任研究者として行われた厚生労働科学研究「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」である。全国規模で在日外国人に対する母子保健支援のあり方を探り、少子高齢化の先にある持続可能な社会の構築にむけた提

言を行った。あれからおおよそ 10 年、「在日外国人母子」を「外国の文化に繋がる子どもと保護者」へ、「母子の健康」を「保育・教育」に言葉を変えながら、一貫してこの問題に取り組んできた。

その間、（１）ドイツではイスラム教国等からの移民が増えたことでドイツ社会に難題が増えたことから、メルケル連邦首相が多文化主義の失敗を宣言し、（２）わが国ではリーマンショックや東日本大震災からブラジル・フィリピン等からの外国人住民の人口に著しい減少がみられ、（３）またわが国では外国人登録制度が廃止されて外国人が日本に住む手続きが簡素化されるとともに、政府が他国からの要望を理由と位置づけながらも外国人看護師・介護福祉士の受

入れが進んだ。領土問題等がクローズアップされる中で、他の人種・宗教・文化に対する差別的言動（ヘイトスピーチ）が社会問題となる状況もみられるようになっていく。多文化社会としての我が国は未だに黎明期の混迷から抜けきれずにいるのだ。

多文化主義が語られる時、その是非に関わらず、いつもある種のもどかしさが垣間見える。礼節を踏み外さないための慎重さや、必要性の理解と感情的な納得との間での葛藤や、よく分からないものに対する不安や、現実的な課題を無視した理想論に対する気恥ずかしさや、システムレベルや領域の違いからの噛み合なさ等、語り手の背景や主張に応じてその色は違っていても、持論をベターと信じながらもベストかどうかの確信を持てずにいる苦しさは滲み出る。

しかしその苦しさを持たない人たちが存在する。子どもたちである。昨年度からユネスコの下部組織である OMEP（世界幼児教育機構）日本委員会の ESD 調査委員として「ESDIV:Equality」の調査を進めているが、「平等」に関連した様々な場面を表した絵に対する子どもたちの意見はとても明快で、時に不適切で、様々なハードルを飛び越えた直感的かつ抜本的な解決策が語られる。

実習指導や調査等で、年間 30～40 件の保育所・幼稚園等を訪問するが、外国に繋がる子どもが環境の中に全くいない環境の方が現在は少ないことを痛感する。エビデンスとして定量化していく作業は今後の課題として、我々が異文化間で感じる差異以上に、今の子どもたちと我々との間にある多

文化環境がもたらす多様性への感覚には違いがあるようにも思う。遊びの中でジャンケンの方法の違いを楽しんだり、様々な国のメロディーを味わったりする主体的かつ自発的な子どもの姿を見る機会も増えてきた。子どもたちは異質な人種・文化を直観的に認識しながらも、それを受入れ楽しむことへの困難さを大人ほど感じる事が少ない。保育・教育者が主導する指導計画に基づくイベント的な活動からの多文化理解だけではなく、日常的な保育の場面の中で異文化同士の衝突が生まれ、難しさを伴いながらも多様性が受容され、新しい環境が生成変化されていくことが、就学前の保育・教育施設では起こり続けている。政治・経済とは別の領域でこそ、多文化共生の環境は当たり前の様に生まれ、生成変化を続けているのだ。

日本の移民政策は、OECD 諸国の中でもトップクラスの少子高齢化や世界第 3 位の GDP 等を始めとした受け入れ国と送り出し国それぞれの大きなシステムレベルでの要因が前提とならざるを得ない。そうであるが故に一人ひとりの生活や、子どもにおいては発達・成長を中心に考える視点が今後さらに求められて行く事となる。ESD を始めとした視点で子どもの人的・物的環境を調整（アコモデート）すること、排他的な利害関係に外国に繋がる母子と日本の母子を位置づけるのではなくひとつの枠組みの中で互恵的な環境を目指すこと、外国に繋がる母子を無力的（パワーレス）な存在ではなく資源すなわち役に立つもの（リソー

ス)の一つとして保育・教育に活かすこと。
今後多文化環境における保育・教育に求められる課題は多い。

年末年始を迎えると思い出すのは、例年発達医科学教室の新年最初のカンファレンスで牛島先生が言われる「日々新生、少しずつでも毎日着実に前に進むことが大きな成果に繋がる」というお話だ。「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」から10年を振り返り、今後の10年に向けて、緩やかであっても着実な歩みを遂げて行きたいと考える。

タイから研究者が大分に来日

江下優樹

大分大学医学部

yeshita@oita-u.ac.jp

毎年、タイの季節で雨期に相当する6月頃、2週間の予定でデング熱調査の為にバンコク近郊を訪問を行っている。今年も同様に実施したが、その際、S博士から、大学院の最終学年に在籍しているK院生の大分での短期研修を依頼された。マヒドン大学から研修のために滞在費を含む研究費が支給された。しかし、研究費をそれから捻出すれば滞在は1ヶ月となり、研究成果は望めないと判断した。そこで、全てを滞在費にして、研究費は私のほうで何とか工面することにした。タイの女性は良く働くと言われているが、確かにそれに輪をかけて日夜研究に励んでくれた。おかげで3ヶ月

という短い期間ではあったが、研究成果は後半で現れた。滞在中は得られたデータを基にして、講座スタッフや日本人大学院生の皆で討論を行った。こういう習慣はマヒドン大学には無かったようで、大変に良い経験と刺激になったようだ。また、研究手順も覚えが早く、一度教えると次は自分で全て行うというチャレンジ精神に富んでいた。また、ある日、大分市内を車で案内したら、次の休みには、地図をもって大分市内どころか、別府までJRで1人で散策して、ついでにバスにもものって観光旅行も自分でしてしまった。1ヶ月を過ぎる頃には、大分に滞在して10年以上になる私でも出かけた事のない観光地にまで足を伸ばしていた。車どころか自転車ももっていないのだが、バスに乗らなくても40-50分歩くことはなんら気にならないのには驚いた。観光する時間をどのようにして見つけるかというと、たとえば実験の合間に、1時間ほど待ち時間があるとすると、その時間の長さに応じて出かけるようである。日本は寒い寒いと、大分に住み始めた9月頃に話していたが、あるときに暖かい防寒服を身につけていた。どこで買ったのだろうか和尋ねたら、大分で一番安い古着専門店を見つけて、これは安いと思ったので買ったとの事であった。価格は1000円だったが、それは立派な防寒服であった。金銭感覚もしっかりしているK院生であった。

K院生が大分に滞在してから2ヶ月後に、S博士が大分を訪問して、1ヶ月間の共同研究を行った。蚊の感染実験を行うには、1

ヶ月では短すぎるので、K 院生が自分の先生でもある S 博士の実験のために前もって準備をしたいと私に申し出た。自分の研究のことも大変なのに、文句も言わずに準備している彼女は、きっと研究することが好きなのだと思うと同時に、マヒドン大学で立派な研究者に将来なるだろうと期待した。こういう頑張り屋さんであった K 院生に研究費を投資したことに悔いはなかった。午前中は看護師として働き、午後は大学院生として研究する生活習慣の中で、一秒たりとも無駄に出来ないと思うようになったのかも知れない。そのような雰囲気をかもし出していた K 院生は、今年の 4 月頃には、晴れて Ph.D. となるであろう。そして、研究者としての道を歩み始めることであろう。ふと、若い頃の自分を思い出すと、こんなにてきばきと出来なかったが、研究を行う事は同じように好きだったように思えた。その私も、今年 3 月で定年を迎える。

あとがき

会報 14 号を皆様のお手元にお届け致します。寄稿して下さいました皆様にお礼を申し上げます。

今年も残るところ数日となりました。例年に無くいろんな事が起こった年のようにも思います。感染症では、東京の代々木公園でデング熱患者の国内感染例が報道されて患者数は 160 名にも達しました。これらの方々が、海外旅行などで再度デング熱に感染されたときは、症状がひどくなること

がありますので、早めに病院に行くことをお勧めします。「デング熱」という言葉は、国内でなじみ(?) の言葉となったように思いますが、蚊に刺されないようにする事が肝心かと思います。また、海外に目を向ければ、アフリカの西海岸で始まったエボラ熱がアフリカから世界中に広がりを見せているようにも思えます。一日も早く終息を迎えて欲しいと願っています。

来年は、皆様方には、平穏な良い年となりますように祈念いたします。

本 会 報 は 、 ウ ェ ブ 上
(<http://square.umin.ac.jp/boshiken/>)
で公開されています。

本活動に御賛同くださっている皆様方には、引き続き御支援の程よろしくお願い致します。(YE)